

医療史料としてみる「吉備大臣入唐絵巻」*1

陶 栗 嫻 西 卷 明 彦*2

要旨：「吉備大臣入唐絵巻」は平安末期から鎌倉初期の絵巻物で、日本史・絵画史料として研究が行われている。一方、医療史料としても分析する必要があり、研究する価値が高いと考える。

キーワード：吉備大臣入唐絵巻、医療史料、色彩

Abstract：A picture scroll 「Kibi no Otodo Nittoh Emaki」 (吉備大臣入唐絵巻) was published in the last years of the Heian century and early in the Kamakura century. Research pertaining to the history of Japan and the historical materials of the painting were examined. However, it appears a history of medical materials should be were thoroughly investigated. 「Kibi no Otodo Nittoh Emaki」 is a valuable research resource.

Key Words：Kibi no Otodo Nittoh Emaki, The Historical Materials of Medical Painting, Color

緒 言

膨大な医療史料の中に、診断、医療道具、器械、書類、模型、薬、看板などの実物がある。また、芸術品として保存してきた絵、彫刻などにも医療・歯科医療の史実が見られる。

今日、12世紀後半（平安末期から鎌倉初期）頃成立の「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾に見る中国と日本の文化交流と医学交流、そしてほぼ同じ時代に書いた「伴大納言絵詞」²⁾の画風との比較、絵師の異国慕情、中国と日本の色彩イメージなどについて検討した。

研究方法

研究材料として「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾は中央公論社の日本の絵巻3（1992年第3版）、「伴大納言絵詞」²⁾は同じく中央公論社の日本の絵巻2（1991年第4版）を使用した。色彩調査はJIS色名（日本工業規格の色名法で関連規格の色名の基本となるもの）を使用した³⁾。

吉備大臣入唐絵巻成立と背景

平安末期から鎌倉初期頃の絵巻物で、遣唐使として唐に渡った吉備真備（695～775）が楼門に幽閉され唐の宮廷から各種の難題を出されたが、安倍仲麻呂の霊の化した鬼に助けられて次々と解決する入唐説話を題材に描くものである。現在、アメリカのボストン美術館が所蔵している。紙本着色、縦32.2 cm、全長2472.6 cm。（4巻に改装）

推古朝（593～628在位）以来、中国との国交が開け、学徒・僧侶らが渡航して、学問・技術を学んで帰った者が多いが、真備はとくに優れて、多

*1 On the Historical Materials of a Picture Scroll 「Kibi no Otodo Nittoh Emaki」

*2 Suxian Tao and Akihiko Nishimaki, The Nippon Dental University School of Dentistry at Niigata, Museum of Medicine and Dentistry 日本歯科大学新潟歯学部医の博物館

本論文の要旨は日本歯科医史学会第283回と第284回月例会において口演した。

くの文明を伝えて来て功のあった人として日本の歴史に刻まれている。吉備真備の伝記「公卿補任」,「続日本記」,「扶桑略記」などが基本となる。「江談抄」の説話集の中で、吉備真備の物語が存在し、これを基に「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾が製作されたといわれている。小松茂美氏²⁾によれば後崇光院(1372~1456)の『看聞御記』に、彦火々出見尊絵2巻,吉備大臣絵1巻,伴大納言絵1巻の記載が見られる。この内、「彦火々出見尊絵2巻」は柳営將軍家に運ばれたが、現在、伝来していない。この3セットは後白河法皇が蓮華王院宝蔵に収蔵すべく制作したものである。

考 察

①「鬼」について

黒田日出男氏によれば日本では鎌倉末期以降、異国人は「鬼」と呼ばれた⁴⁾。

「鬼」というイメージは、「大辞林」⁵⁾によれば日本では、姿が見えない意の『隠』字音(おん)の転という。

1. 天つ神に対して地上の国つ神, 荒ぶる神
 2. 人にたたりをする怪物, 物の怪, 幽鬼
 3. 醜悪な形相と恐るべき怪力をもち, 人に害をもたらす。想像上の妖怪。仏教の影響で, 夜叉, 羅刹, 餓鬼や地獄の獄卒牛頭, 馬頭などをさす。牛の角を生やし, 虎の皮のふんどしをつけた姿で表されるのは, 陰陽道で丑寅<北東>の隅を鬼門といい, 万鬼の集まる所と考えられたためという。
 4. 放逐された者や盗賊など社会からの逸脱者, 先住民, 異民族, 大人, 山男などの見なれない異人をいう。山間に住む山窩などをいうこともある。
 5. 子孫の祝福に来る祖霊や地霊
 6. 死者の靈魂, 亡霊
 7. 人情のない人, 冷酷な人, 気の毒に思いながらも冷酷に振る舞うこと。
 8. 物事に精魂を非情に傾ける人
 9. 接頭詞, 名詞に付く, 無慈悲な, 冷酷な, などの意を表す。
 10. 強くて恐ろしい, 勇猛などの意を表す。
 11. 異形の, 大形のなどの意を表す。
 12. 病
- 中国では「鬼」(gui)というイメージは次ぎの通りである。

1. 亡霊, 幽霊



図1 阿倍仲麻呂の化身という「赤鬼」姿
(「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾より)

這個宅子里有鬼→この屋敷には亡霊がついている/門鬼→幽霊が出る。

2. 鬼子→(中国を侵略した) 外国人にたいする増悪の言葉

鬼子兵→外国兵め

3. 人をののしった言い方, 特によくない習癖に取り憑かれている人, 中毒者

烟鬼→アヘン中毒者/酒鬼→アル中, のんだくれ/賭鬼→ばくち常習者/討厭鬼→いやなやつ/胆小鬼→臆病者/色鬼→(男の) 色気違い

4. こそこそしている, うしろ暗い, いかかわしい, インチキである, 悪い, ひどい

鬼天氣→いやな天氣/這鬼地方連草都不長→こんなひどい所は草木さえも生えない/鬼鬼崇崇→陰でこそこそする/鬼話連篇→うそだらけ

5. 小鬼→子供, チビ子

以上のことは鬼の表象は中国と日本では共通性があり, 外国人を鬼とみる表象は日本固有のものではないことを物語っている。「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾では, その絵画表現は一定の記号的なパターンがあり, 吉備大臣は黒い衣冠姿で表現されている。阿倍仲麻呂の化身という鬼は赤で(図1)表現されているが, 吉備大臣に協力する時は黒い衣冠姿で登場する(図2)。このことは既に当時中国を赤というイメージで絵師がみていたことを物語り, 日本において黒が従三位以上の衣冠姿²⁾であることから赤い鬼が黒い衣冠姿になることは日本側に協力するという表現であり, 中国を赤, 日本人を黒とする記号が「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾が有効に機能している。仲麻呂の化身といわれる赤鬼は黒い衣冠姿になることは邪鬼から守護神になるこ



図2 阿倍仲麻呂が吉備大臣に協力する時の黒い衣冠姿（「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾より）

とを物語っている。

② 訶梨勒丸について

江談抄の中に吉備大臣は中国からもってきた宝物として「文選、囲碁、野馬台詩」が挙げられているが、宝物として訶梨勒丸をもってきたという記載がない。

江談抄に宝物として訶梨勒丸が挙げられなかった理由は「文選、囲碁、野馬台詩」は士大夫階級の文物であったのに対して、訶梨勒丸は技芸に属するもので方技として蔑視されていたために吉備大臣がもたらしたものとは記載されなかったと考えられる。これは古代中国の方技蔑視の思想に通じることである。

③ 検便の場面について

黒田日出男氏⁴⁾によれば、「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾にある検便の場面（図3）は日本人が考えた中国の架空の話の場面であるかのような表現がある。

現実には中国宋の時代、医療制度は機構の整備が進み、宋の初期翰林医官院が設立された。1082年になって医官局を改称された。教育面では北宋政府は太常寺の下に太医署を設置した。992年に太医局と改称された。「三舎之法」（官吏登用試験



図3 検便の場面の一つである。吉備大臣は囲碁の名人と勝負をした。負けそうになった時、相手方の碁石を一つ飲込んだ。気づいた唐の官人らが訶梨勒丸という下剤を飲ませて、その場で便の中に碁石がないか調べている。（「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾より）

の法）が医学教育の分野にも適用されるようになった。当時の政府はまた比較的整った司法制度を制定した。そして、民事、刑事事件などに関わる医学的検査の法令が規定された。最も重要な法医学の著作が宋慈（図4）の「洗冤集録」である。その中に死体検査、生体検査、物証検査について述べ、また第一次検査と第二次検査とに分けられた。この「洗冤集録」は近代まで日本、韓国、イギリス、ドイツ、フランス、オランダなど各国の言葉にも翻訳された⁶⁾。

「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾にある検便の場面（図5）は現場検査と見られる。宋の時代にはすでに存在していて、臨床検査、法医検査などを図像化したもので、貴重な史料である。しかしながら、日本人の絵師がこのような事実を把握していたか不明である。

④ 中国に対する表象分析

「吉備大臣入唐絵巻」の書き方は平安人のイメージした「唐」であると黒田日出男氏が指摘している⁴⁾。小松茂美氏によると画風は「伴大納言絵詞」と似て、同じ絵師によって描かれたと述べられている^{1,2)}。その理由は当時の絵師が大和絵のほか、唐絵の需要にも応じなければならなかった宮廷絵所にはおびただしい唐絵の絵本が常備されていたと推定されている²⁾。

絵師の異国への慕情は単に空想だけのものではなく中国の当時の現実と一致した部分があると考えられる。当時の絵師の中国に対する色彩表象を



図 4 宋慈(1186~1249 年), 南宋時代の法医学者で, 彼の著わした「洗冤集録」は, 中国最初の系統的な法医学専門書である。(「中国医学の歴史」⁶⁾より)

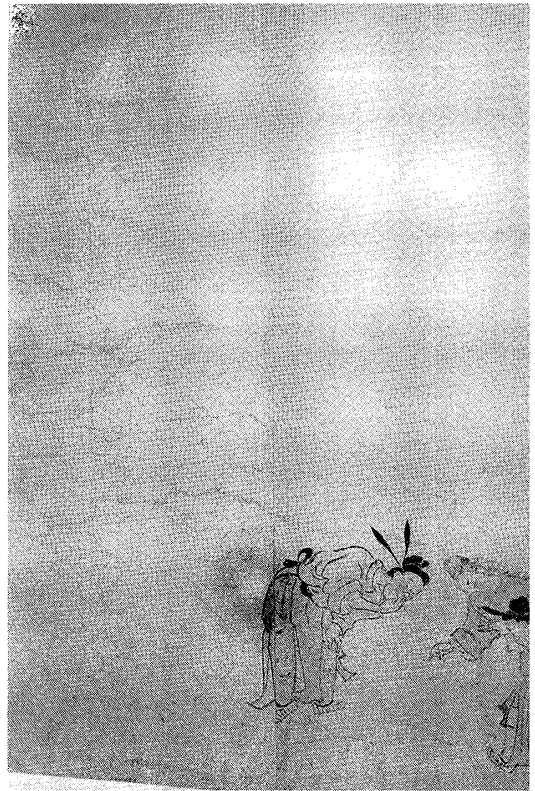


図 5 現場臨床検査の場面
(「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾より)

「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾と「伴大納言絵詞」²⁾の比較により分析を試みた。比較には JIS 色名表を用いた³⁾。

中国では漢民族の色彩は赤が高貴な色として主に取り扱われ, 皇居のことは朱闕, 高位の人の乗り物は朱軒, 高位の人の邸は朱門と呼ばれていると城一夫氏⁷⁾は述べている。これは赤がかなり以前から中国では代表的な色として使われていることを物語っている。「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾の色は「伴大納言絵詞」²⁾の色と比較して, 「伴大納言絵詞」²⁾には赤色はあまり使われず, 10 PB~10 B の青色が多い。「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾には中国の土地, 人物, 皇帝について 10 RP~10 R の赤色が多く使われている。

一方, 中国の北京故宮博物院にある洛神賦図(顧愷之・晋), 歩輦図(唐), 宮楽図(唐), 八達春遊図(超岳・五代), 韓熙載夜宴図(顧闳中・五代), 清明上河図(張昞端・北宋)⁸⁾絵と対照すると, どちらかというと, 10 RP~10 R の赤色などの暖色系が多い。このことは城一夫氏⁷⁾の指摘と一致している。このように色彩表現は民族, 歴史, 習慣

など文化的傾向と密接な関連がある。この分析は重要な意味がある。元来赤色は塚田敢氏⁹⁾によれば, 赤は情熱, 危険の色であり, 青緑色系は沈静深遠の色である。このことから, 黒田日出男氏⁴⁾の指摘する外交は危険という表象は色彩的に有効である。このような概念で検便図を眺めると, 吉備大臣は着衣を脱ぎ, 灰色の小袖着流し姿であり, 全絵巻の中でも特異である。また今日, 医療現場で癒しの色として, 青緑色系を使用されることが多いが, 検便図は 5 R の表現はなく, 10 YR~10 B の間で他の場合と異なり, 寒色系である。このことは当時の絵師は医療の表象が寒色系であるのではないかと推測される。

結 論

① 異国人を鬼と呼ぶのは日本独特の概念である。と一般では考えられているが, すでに中国にも同様な概念は存在している。このため, 日本においてのみ鬼を外国人と呼んでいるわけではない。「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾に同一の鬼を「赤鬼」の形で中国を表象して, 「黒衣」を着せることにより日本の守護神に変化させていると考えられる。

② 「江談抄」に宝物として訶梨勒丸が挙げな

かった理由は、「文選，囲碁，野馬台詩」は士大夫階級の文物であったのに対して，訶梨勒丸は技芸に属するもので，方技思想により蔑視されていたため吉備大臣がもたらしたものと記載されなかった。これは古代中国の技術蔑視の思想に通じることである。

③ 中国宋の時代に医学に関する教育あるいは法体系はすでに確立していた。臨床検査，現場検査は当時では現実なことであり，検便は決して架空な話ではないが，どこまで日本の絵師が熟知していたか不明である。

④ 色彩については赤は興奮色で，青は鎮静色である。「吉備大臣入唐絵巻」¹⁾に中国の土地，人物，皇帝についての色彩はほぼ暖色系であるのに対して，吉備大臣は寒色系である。色彩の違いで異国と区別していた。

「吉備大臣入唐絵巻」は医療史料としても研究価値があると考ええる。

文 献

- 1) 小松茂美：吉備大臣入唐絵巻. 日本の絵巻 3, 第 3 版, 中央公論社, 東京, 1992
- 2) 小松茂美：伴大納言絵詞. 日本の絵巻 2, 第 4 版, 中央公論社, 東京, 1991
- 3) 川添泰宏：色彩の基礎—芸術と科学, 第 2 版, 美術出版社, 東京, 1998
- 4) 黒田日出男：謎解き日本史・絵画史料を読む, 日本放送出版協会, 東京, 1999
- 5) 松村 明：大辞林, 第 1 刷, 三省堂, 東京, 1988
- 6) 傅 維康(主編)：中国医学の歴史, 第 1 版, 東洋学術出版社, 市川, 1997
- 7) 城 一夫, 徳井淑子, 山田欣吾, 他：色彩の歴史と文化, 第 1 版, 明現社, 東京, 1996
- 8) 小川裕充(監修)：故宮博物館第 1 巻, 南北朝—北宋の絵画, 第 1 刷, 日本放送出版協会, 東京, 1997
- 9) 大井義雄, 川崎秀昭：色彩, 改訂版, 日本色研事業社, 東京, 1999

筆者への連絡先：陶 栗嫻

〒 951-8580 新潟市浜浦町 1-8
日本歯科大学新潟歯学部医の博物館
Tel 025-267-1500 (内線 477)